The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	島津忠夫先生の古今集購読
Author(s)	滝川, 幸司
Citation	語文. 2017, 108, p. 15-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71004
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

島津忠夫先生の古今集講読

滝　川　幸　司

私は、島津先生の授業を二回生の時、一年間受講しただけである。私よりも長い期間、深く先生の教えを受けられた方は大勢いらっしゃることであろう。その意味で、先生の追悼文を書く任に堪えないと思うのだが、一年間の授業が今の私を作ったことは間違いなく、また、授業以外でご教示下さったことは数知れない。ここに一文をしたためる次第である。

島津先生のお名前を知った（見た）のは、恐らく角川文庫『百人一首』の訳注者としてであろう。手元にある奥付に「昭和六十二年二月二十日　改版二十五版発行」とあることから推せば、高校三年生の時に購入したものと思われる。ただ、その頃、訳注者の名前に大して興味はなく、当時の私は、平安朝の物語を耽読する高校生で、和歌はどちらかといえば苦手で、果たして通読したかもあやしい。

大阪大学に入学した一九八八年、一回生も受講できる島津先生の講義があった。教養部の国文学講義だが、この時の講義は近世和歌であり、今なら絶対に受講するところだが、平安朝以外に興味のなかった当時の私は受講せず、二回生になって初めて先生の講義に出席した。

『島津忠夫著作集』第十四巻に「講義題目」の一覧がある。一九八九年を確認すると、教養部については、以下のように記される。

国文学（近代・現代短歌）〔一般教養〕
古今集両度聞書　〔講読S〕
風狂者の系譜　〔講義S〕

この年も国文学講義は受講せず（本当にもったいない）、講読S、講義Sを履修した。それが島津先生の講義を受けた最初で最後になった。講義Sでは、西行に関する話題で、久保田淳氏『西行の世界―旅と草庵の歌人』（日本放送協会・一九八八年）を、これはいい本だ、と紹介されてすぐに購入したことを覚えている。

私にとって何といっても強く影響を受けたのが、講読Sである。

源氏物語を研究したいと思っていた私は、和歌の勉強も必要だろうし、それが古今集なら当然だという思いで受講した。確か、私を含め五人の受講生で（海野圭介君もいた）、全員、国文学専攻に進学した。

第一回目は教室で行われたが、その後は、教養部の島津先生の研究室で開かれた。当時の教養部は相部屋で、島津先生の他に、山口堯二先生、後藤昭雄先生がいらっしゃった。ちなみに、後藤先生の講読Ｓ（拾遺和歌集）もこの部屋で開かれており、これも私は受講した。

実際に始まった講読は、片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題第三巻』（赤尾照文堂）に収められた、宗祇の古今集両度聞書をテキストに進められた。宗祇の名前程度は知っていたものの、何もかもが初めて触れる資料で、その上、対照する注釈が増えてくる。顕注密勘、僻案抄、栄雅抄、六巻抄が加わり、記憶によれば、最後には宗碩の古聞が加わった。何も知らない二回生にとっては難解きわまりない授業のように思われるだろうが、島津先生の語りはとにかくおもしろかった。古今集の和歌自体の解釈はもとより、中世の注釈によって形作られる解釈の方法など、新鮮な体験であった。

最後に加わった古聞は斯道文庫論集に掲載された翻刻を用いて読んだのだが、今確認すれば、第二十二輯で、一九八八年三月に刊行されたばかりの資料だった。我々が受講する一年前である。思えば、講義Ｓで紹介された『西行の世界』も一九八八年十一月刊行である。先生は、最新の研究を惜しげもなく私たちに紹介して下さったのだ。もっとも、先生は、惜しむとかそういう感覚はお持ちでなかったであろうと思う。ともかく、贅沢な授業であった。

最新の研究、資料であったとしても、二十歳になるやならずやの学生に、そのおもしろさは伝わってくるものなのだ、と思う。研究の蓄積、思考過程の明晰さ、言葉の選び方など、島津先生だからこそ可能であった面も多分にあろうが、研究内容を薄めて講義するよりも、やはりおもしろさは格段に上がる。受講生は、研究そのものに理解が及ばないことは多々あっても、教員が楽しく研究しているか否かには敏感である。研究のおもしろさを伝えるのに、本人がおもしろがっていないのでは、やはり伝わらないこともあるということであろうか。

この講読を通して、これほどまで長く注釈がなされてきた古今集自体に興味が引かれた。対照した注釈が上述のようなもので、もし、毘沙門堂本古今集注のような（これも講読で、荒唐無稽ではあるが、極めておもしろい注釈として先生から内容を伺った記憶がある）説話を中心とした注釈であれば、興味の方向も変わったかも知れないが、結局、源氏物語を研究しようと考えていた私は、路線を変更し、卒業論文は古今集をテーマにすることになったのである。

この講読は、島津先生の阪大定年の年であり、阪大最後の教え子の一人ということで、先生は私のことを覚えていて下さったよ

うだ。

その後先生は、武庫川女子大学に移られたが、私が最初に学会発表をしたのが、武庫川での和歌文学会関西例会（一九九四年七月二日）だった。「古今和歌集の勅撰性」という題目で発表した。懇親会後の二次会では、ちょっとした事件も起きたが、島津先生が隣にいらっしゃって、「古今集はおもしろいんや」と仰ったことが、今でも耳に残っている。

古今集をテーマに選んだ私だが、それ以後、古今集と同時代の漢詩文に研究の中心を移している。しかし、自分自身では、今でも古今集研究者だと思っている。現任校では、漢文学分野担当で、和歌の授業を行うことは希だが、一回生用の入門演習では、古典文法総復習を兼ねる内容もあって、古今集の和歌を取り上げることが多い。また前任校でも、一年生用の言語・文学という授業で、古今集をテキストにした。非常勤先で古今集を講義することも何度かあった。最近は古今集の和歌を話し始めると、大体、一時間で一首しか進まない。話すのが楽しくて仕方がなく、学生は呆れているかも知れないが、おもしろがっていることが伝わっていれば、と思う。これも、先生から学んだことだと、勝手に考えている。そういえば、先に触れた私の最初の学会発表は、古今集の排列を問題にしたのだが、それは、個々の歌を編者がどう排列するか、という問題を取り扱った内容で、つまりは、編者の視点に重点を置いて構想したものであったのだが、先生の百人一首注釈の姿勢が頭の片隅にあった。周知のように、先生の注釈は、あくまで編者藤原定家の解釈に重点を置かれたものであった。

先生からは学恩を蒙るばかりで、何もお返しできていない。ただ、唯一、先生に喜んでいただいたことがある。角川文庫の『百人一首』が新版として、一九九九年十一月に刊行された。早速読んだ私は、一箇所疑問に思うところがあり、十二月の和歌文学会関西例会（阪大で行われた）で申し上げた上で、お手紙をお送りした。ある歌人の伝記についての部分だが、先生は大変喜ばれ、訂正された再版を送って下さった。

冒頭にも述べたように、私は、島津先生の授業を一年間しか受講していない。しかし、その授業で、島津先生が古今集を―それが中世の古注であったとしても―取り上げて下さらなかったら、私は古今集を卒論にすることはなかったであろう。恐らく源氏物語辺りで卒論を書き、果たして今のような職に就いているかも疑問である。高校時代、古典の中でも、和歌と漢文が嫌いだった私が、専門は平安時代の漢詩文と和歌ですというようになったのも、もとを正せば島津先生の講読があったからである。

たった一年受講しただけの私ですら、これほどまでに影響を受けている。それ以上に、また長期間教えを受けてこられた方も数多くいらっしゃるであろう。偉大な先輩方も多くいらっしゃる。その方たちの末席に加わるのは、まことに分不相応な気がするのだが、許していただければと思う。

語文の島津忠夫教授退官記念輯（五十三・五十四輯・一九九〇年）に、後藤昭雄先生が「島津先生の御退官に当たって」の中で、

「T君」の言葉を引用されている。「国文学者の中で、偉い先生で一番ささくな人柄の先生は島津先生である。また、ささくな人柄の先生の中で一番偉い先生は島津先生である」。後藤先生は「先生のお人柄を言い得た名言」とお書きで、私も本当にそう思う。

先生のご冥福をお祈りする。

（たきがわ・こうじ　京都女子大学教授）